

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

階級意識の変化が言語に与える影響： RPにおける/ae/を中心に

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): //ae/から/a/, 階級意識の変化, 上流階級志向, 大衆志向 キーワード (En): 作成者: 山本, 晃司 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006033

階級意識の変化が言語に与える影響

— RPにおける/æ/を中心に

山本晃司

要旨

イングランドで標準発音とされる Received Pronunciation (以下、RPと略)を中心に扱った英語音声学の代表的な文献に *Gimson's Pronunciation of English* がある。第7版に至るまで、その音素表記に変更は見られなかったが、第8版では音素表記の変更が見られる。本稿では/æ/から/a/の変化を中心に、音声的要因からではなく、主に社会的要因、イギリスにおける階級意識の変化が影響していることを指摘している。

キーワード：/æ/から/a/、階級意識の変化、上流階級志向、大衆志向

はじめに

イングランドで標準発音とされる Received Pronunciation (以下、RPと略)を中心に扱った英語音声学の代表的な文献に *Gimson's Pronunciation of English* がある。その初版は A. C. Gimson により1962年に *An Introduction to the Pronunciation of English* というタイトルで出版され、第4版は S. Ramsaran、第5版以降は *Gimson's Pronunciation of English* というタイトルに変更され、A. Cruttenden が引き継いでいる。その最新版となる第8版が2014年に出版された。第8版で目を引くのは、/eə/ から /ɛ:/、/æ/ から /a/ となった音素表記の変更である。これらの表記変更には音声的要因があることは事実であるが、本稿では /æ/ から /a/ の表記変更を中心に、主に社会的要因、イギリスにおける階級意識の変化が影響していることを指摘していく。

1. /æ/ の記述内容

/æ/ または /a/ を採用するかは著者、または出版社によって異なる⁽¹⁾。しかし、Roach (2009⁴: 5, 35) によると、音素表記が果たすその役割にも原因があるという。音素表記は必ずしも正確な音質を表示する必要がないため、なるべく簡単な記号、例えば、キーボード上

にある記号が採用される場合もある。逆に、実際の音により近い記号が採用される場合もある⁽²⁾。そのため、文献によって音素表記が異なることから、読者に混乱を与えることになる。この問題を解決するために、イギリスで出版される英語発音関連の文献は A.C. Gimson の *An Introduction to the Pronunciation of English* 初版で採用されている記号を “*de facto standard*” (Roach, 2009⁴: 5) とすることが多いという。それゆえ、記述内容に変更を加えても、音素表記には変更を行えなかった第7版までの方針を第8版で変更したのは大きな方針転換といえる⁽³⁾。

本稿では /æ/ から /a/ の変更を中心に取り扱うが、その記述内容の変化を Gimson による初版と Cruttenden が引き継いだ第5版、そして最新版の第8版から比較し、母音図での配置も以下に記しておく。

“the front of the tongue is raised just below the half-open position”

(Gimson, 1962¹: 100 下線筆者)

“the front of the tongue is raised to a position midway just above open”

(Cruttenden, 1994⁵: 103 下線筆者)

“the front of the tongue is raised to a position just above open”

(Cruttenden, 2014⁸: 119 下線筆者)

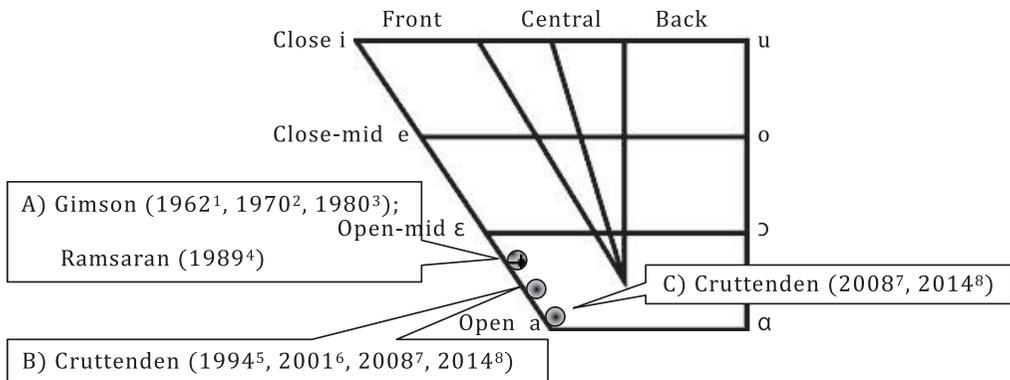


図1. *Gimson's Pronunciation of English* の初版と第5版以降の /æ/ の母音配置図

初版から第4版までの /æ/ は “half-open” (または “open-mid”) の真下あたりの音質とされている (図1のA)。しかし、第5版以降では、“open-mid ε” と “open a” の中間 (図1のB) とされ、第7-8版になると、“open a” の真上と記されている (図1のC)。また、Cruttenden は第6版以降、“This vowel has become more open recently, previously being nearer to C⁽⁴⁾”

[ɛ] where it is now close to C [a] .” (Cruttenden, 2001⁶: 111) と述べており、第8版からその記述内容に合わせた表記が採用されたことになる。

/æ/ がより広い音質となったその音声的要因は、音声学者によって異なる。Cruttenden (1994⁵: 103) は長年にわたる中舌母音の /ʌ/ の動きが要因であるとし、Wells (1982: 292) は /ɪ/ と /e/ が広い音へと移動しているため、/æ/ もその流れに合わせた移動としている。その要因に違いはあるにせよ、かつて [ɛ] に近い音質であった /æ/ が次第にその音質を変化させていることに違いはない⁽⁵⁾。

2. 階級指標としての言語

前節では、音声的観点から簡単に /æ/ の変化を見てきた。この節からは社会的観点から /æ/ の動向を探っていく。

まず、階級⁽⁶⁾と言語の関係であるが、この関係を取り上げた学者の一人に、イギリスの言語学者 Alan Ross がいる。Ross はこの2つの関係を以下のように述べている。

“Today, in 1956, the English class system is essentially tripartite—there exist an upper, a middle, and a lower class. It is solely by its language that the upper class is clearly marked off from the others.” (Ross, 2002 [1956] : 3)

今から約50年以上前の文献であるが、この見方は現在も変わっていないようである。社会人類学者 Kate Fox は *Watching the English* (2004: 73) の中で “And one cannot talk at all without immediately revealing one’s own social class.” と述べている。口を開けばその人の階級が分かるというのだが、この見解を裏付けるアンケート結果が2014年3月9日に発表された。このアンケートは様々なテーマに関して調査を行う機関 Ipsos MORI によるものである。この機関は Ipsos UK と MORI が合併し、2005年に Ipsos MORI となったイギリスの市場調査機関である。Ipsos MORI (2008b) の “Survey on Class” (2008年3月7-9の期間、電話で行われ、イギリス在住の16歳以上1,054人が調査対象) では「どの程度、話し方によって階級が当てられるか？」という問いが設けられている。その結果は、“All of the time” が27%、“Some of the time” が39%となっており、話し方、つまり言語が階級を表す指標となっている。第2節では言語、本稿では /æ/ の発音と階級の関係を取り上げ、階級意識の変化が言語にどのような影響を与えているのかを述べていく。

2.1 上流階級が使う /æ/ の響き

Ross は上流階級とそれ以外の階級に見られる言語の違いを論文 *U and Non-U*⁽⁷⁾ で発表し、Nancy Mitford により編集された *Noblesse Oblige* (1956) の中に収めている。Crystal (1995: 364) はこの論文について、“It was an impressionistic but perceptive account, and it provoked an enormous public reaction.” としている。当時の人々が、いかに言葉使いに関心をよせ、気を遣っていたかがうかがえる。その論文の中で上流階級が使う /æ/ の特徴を次のように述べている。

“Many (but not all) U-speakers make *get* rhyme with *bit*, *just* (adverb) with *best*⁽⁸⁾, *catch* with *fetch*.” (Ross, 2002 [1956]: 18)

Crystal (1995) が「著者の印象だけに基づく説明である」と評するように、Ross の音声描写は正確な部分もあれば、やや不正確な部分もある⁽⁹⁾。しかし、“catch” /kætʃ/ と “fetch” /fetʃ/ が韻を踏むという説明、つまり /æ/ が [ɛ] となる点に関して言うと、この特徴は英語音声学 A. C. Gimson (1962) の説明と一致し、RP の中でも “refined RP” (Gimson, 1962: 101) とされている。

以下の風刺画はイギリスの英字新聞 *The Guardian* に載せられた Steven Bell によるものである。ここで描かれている人物はエリザベス女王であり、refined RP の代表的な使い手の一人とされている。



絵 1. Steve Bell's If ... on the 60th anniversary of the Queen's coronation (2013)

上記の台詞内では “Thanks” が “Thenks”、“hat” が “het” とあるように、/æ/ の発音が [ɛ] で実現されていることを表している⁽¹⁰⁾。

しかしながら、*Gimson's Pronunciation of English* と改名し、第5版から引き継いだ Cruttenden (1994⁵: 80) は refined RP を “a figure of fun, and the type of speech itself is

often regarded as affected”とし、気取りすぎた発音にはマイナスのイメージが伴うとしている。この見解は、Cruttenden (1994⁵) だけではない。2014年4月7日の英字新聞 *The Times* に “Voice coaches wanted to rub polish off posh accents” という見出しの記事が掲載された。この見出しにある “posh” とは “upper class” (*Longman Dictionary of Contemporary English*, 2014⁶ 1406) を意味する。その記事内容は Queen’s English のような発音を習得する人々が減りつつあり、RP のような発音は流行らず、むしろ出世の妨げにもなりうるという。この記事内容にあるように、上流階級の発音、さらには RP に対してもマイナスイメージが伴うようになってきている。このような状態に至るその背景には何があるのであろうか。次節では階級に対する人々の考えについて述べていく。

3. 階級意識の変化

3.1 1960年代と近年の階級意識

かつての階級意識を描いた映像がイギリスの国営放送 (the British Broadcasting Corporation、以下、BBC と略) のアーカイブとして残っている。 *The Frost Report* (1966年から1967年の放送) という番組の中で、 *The Class Sketch* というコメディが1966年4月に放送された。そのコメディでは、写真にあるように、3人の男性が左から上流、中流、労働者階級の順に並んでいる。身なりの違いもあるが、彼らがお互いにかけて台詞内容にも違いがある。その一部を以下に記しておく。

- 左端の男性 ➡ 中央の男性：
“I look down on him because I am upper class.”
- 中央の男性 ➡ 右端の男性：
“I look up to him because he is upper class but I look down on him because he is lower class. I am middle class.”
- 左端の男性 ➡ 左端と中央の男性：
“...I know my place. I look up to them both.”



写真1. *The Class Sketch* (1966)

作風としてはコメディであり、多大に誇張された演出もあるであろうし、当時の人々が皆、このような階級意識を持っていたとは言い切れない。しかし、階級が高いほど尊敬され、低いほど見下されるという風潮が、少なからずあったからこそこのような形で表現されたと言える。これと似たような階級意識が映画 *My Fair Lady* (1964) でも見られる。この映画では階級と

言語の関係が描かれている場面があるが、その1つに以下のような台詞がある。

“In six months, I could pass her off as a duchess at an Embassy Ball. I could get her a job as a lady's maid or a shop assistant which requires better English.” (*My Fair Lady*, 1964)

上記は中流階級であるヒギンズの台詞である。ヒギンズは、特定の店を持たずに路上で花を売るイライザを労働者階級とし、皇妃、女中は上流または中流階級であり、良き英語を使う階級としている。ここでも階級、そして言語面での上下関係があることが描かれている。ここで取り上げた例はいずれもフィクションであるため、証拠としての信憑性が高いとは言えないが、この当時の階級意識を垣間見ることができる資料である。では、近年でもこのような考えは残っているのだろうか。

3.2 階級に対する意識調査

Ipsos MORI (2008a) による階級についての調査 “Perceptions of Social Class (trends)” では、1981年から2008年にかけて、18歳以上の成人600人から1500人のイギリス人に、ほぼ同じ内容の質問が問われている。その内容は「中流または労働者階級に属しているという人が大半であるが、そのいずれかを選ばなければならない場合、どちらを選びますか？」である。その結果を以下に載せておく。

	1981年 5月	1986年	1989年 3月 2-13	1991年 3月 7-25	1991年 8月 22	1996年 10月 18-21	2000年 6月 2	2005年 4月 7-9	2008年 3月 7-9
	%	%	%	%	%	%	%	%	%
労働者階級	63	66	67	65	61	61	58	57	52
中流階級	-	28	30	29	-	32	35	40	44
中・上流階級	28	-	-	-	30	-	-	-	-
不明	9	-	-	6	9	-	-	-	3
どちらでもない・不明	-	5	4	-	-	7	7	3	-
無回答	-	-	-	-	-	-	-	-	1

表1. Ipsos MORI “Perceptions of social class (trends)” (2008a)

意外なことに、この調査を開始した1981年の時点ですでに半数以上の人々が労働者階級を選ん

でいる。この傾向は2000年以降、若干、薄れつつあるようにも見えるが、労働者階級を選ぶ人が上回る状態にある。かつての上流階級志向が衰退し、自分たちの置かれている現状に見合った判断を下した、または労働者階級であることに誇りを感じるようになったとも考えられる。

このような傾向を早くから予想していた学者がいる。英語音声学者 J.C. Wells である。Wells は McCrum *et al.* (1986) による *The Story of English* の中で次のようなコメントを残している。

“Working-class culture has come to be admired in many ways... it has become smart to go down-market. People are now a bit embarrassed to be seen imitating upper-class behaviour, and this is reflected, of course, in their pronunciation.” (McCrum *et al.* 1986: 30)

労働者階級の文化が賞賛され、上流階級の振る舞いを真似ることに当惑を感じるという⁽¹¹⁾。この上流階級的な振る舞いに当惑を感じるという点を裏付けるアンケート結果がある。Ipsos MORI (2008b) による “Survey on Class” (2008年3月7日から9日の3日間、16歳以上の成人1054人に対して電話で実施) での質問に「状況によって、自分のふるまいを異なる階級(上、中、労働者)に変えたことがあるか?」がある。その結果は、“Yes—a higher class” が4%、“Yes—a lower class” が2%、“Yes—the class depends on the circumstances” が11%、そして “No, I have not pretended to be in a different class.” が84%であった。上流階級的な振る舞いをする人は極めてまれであり、大半の人々は特に気にすることなく振舞っているようである。

言語面においても Wells の見解が当たっている。Ipsos Mori (2008b) による同調査で「“lavatory” と “toilet”、どちらが上品な言葉使用であるか?」という質問がある。これらの語が選ばれたその背景には、“lavatory” は上流階級、“toilet” がそれ以外の階級で使われるという違いがある (Ross, 2002 [1956] ; Fox, 2004)。この回答結果は “lavatory” が36%、“toilet” が46%となっている。しかしながら、「日常的にはどちらの語をよく使うか?」という問いに対しては、“lavatory” が5%、“toilet” が79%となっている。上品な言葉であることを知ってはいるが、“lavatory” = 上流階級の言葉という関係・意識が希薄になり、普段はそのような違いを気にしないようである⁽¹²⁾。/æ/ を [ɛ] と発音する、しないもこの “lavatory” — “toilet” のような背景があるのかもしれない⁽¹³⁾。

最後に、Ipsos MORI (2008b) が設けた質問「出世するには正しいアクセント⁽¹⁴⁾が重要か?」を挙げておく。この質問は1991年と2008年に行われている。1991年では、“Yes” が59%、“No” が32%であったのに対し、2008年では “Yes” が44%、“No” が47%となっている。正しいアクセントより実力が重視されるということであろう。3.1で例示した映画 *My Fair Lady* での一

節はもはや通じない時代になったと言えよう。

おわりに

本稿では /æ/ の変化が社会的要因にあるという視点で述べてきた。上流階級志向から大衆志向へと向かうに伴い、/æ/ もその傾向に合わせた変化となっている。しかしながら、上流階級志向が全くないという訳ではない。2013年4月17日にBBCのジェレミー・パックスマンが司会を務める番組 *Newsnight* で “Why people change the way they speak” という特集が放送された。数人の著名人の話し方を取り上げ、時と場所によって変わっていることを紹介している。以前は上流階級のような話し方であったが、今は街の若者が使うような話し方となっている人や、議場では RP を使うが、街へ出て市民との交流をはかる際には、大衆的な話し方に変わっている人、逆に、労働者階級であるコックニー話者が RP のような話し方をするようになった人もいるという。いずれにせよ、言語変化には様々な観点から見る必要があり、社会的要因も大きく関わっていることに違いはない⁽¹⁵⁾。

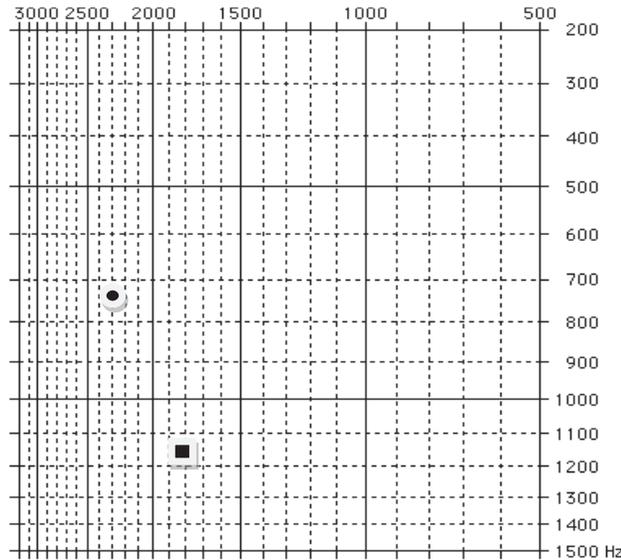
註

- (1) *Gimson's Pronunciation of English* も出版社が Hodder Arnold から Routledge に移ると同時に、その表記変更がなされている。
- (2) 音質の変化は指摘するものの、従来の発音表記を採用する方法もある。/æ/ に関して言うと、Daniel Jones による発音辞典 *English Pronouncing Dictionary* を第15版から引き継いだ Peter Roach と James Hartman は *Cambridge English Pronouncing Dictionary* (1997¹⁵: ix) で、その音質がより広い音になっていることを指摘し、/a/ という記号が好まれる時が来ることを示唆している。しかし、その最新版 (2011¹⁸) においてもまだ /æ/ が採用されている。
- (3) /eə/ から /ɛ:/ の変更もその1つ。
- (4) Cardinal Vowels の C を指す。
- (5) 簡単な音声分析として、音声学者 Lilius Armstrong (1882-1937) の音声 (1926年に録音) と2012年に出版された Hancock (2012) の *English Pronunciation in Use* の第2版に録音されている /æ/ の母音を比較しておく。いずれも女性話者である。

Lilius からは “carrying, handbag, taxi, cab”、Hancock からは “man, black, hat, bag, cash, hand” の音声を生声分析ソフト *praat* で分析した。その各語のフォルマント平均値は以下のようにになっている。

	F1	F2
Lilius Armstrong	735	2278
<i>English Pronunciation in USE</i>	1190	1789

資料としては少ないが、両者を比較するだけでも/æ/の音質がかなり異なることが分かる。フォルマント図で表すと以下ようになる。(Armstrongは●、*English Pronunciation in Use*は■で表示する)



- (6) *Longman Dictionary of Contemporary English* (以下、*LDOCE*と略) では“class”の第一語義に“one of the group in a society that different types of people are divided into according to their jobs, income, education etc” (2014⁶: 309) とある。語義上の説明では、「職、収入、教育」という指標しかなく、言語は挙げられていないが、その指標は様々である。例えば、社会人類学者 Kate Fox は *Watching the English* (2004: 15) の中で、テラスハウスをどのように装飾するか、運転する車の車種は何か、車の洗浄は自分で行くか、いつ、誰と、どこで食事をするのかなどの指標を挙げた上で、言語もその1つとしている。このような指標をもとに、イギリスの社会階級は一般的に、上流、中流、労働者階級の3層構造となっている。また、労働者階級を表す英語には“lower class”という表現もあるが、*LDOCE* (2014⁶: 1090) によると、「今では侮辱的な語」とされているため、近年では“working class”にかわりつつある。
- (7) *U*は“Upper class”の頭文字を指し、*Non-U*は“Upper class”以外の階級を指す。
- (8) Jones (1909¹: 35, 42) はこれらの特徴を RP ではなく、ロンドン方言としている。また第4版 (1956) では、前者は削除、後者は/ɪ/から/ə/へと修正されている。
- (9) Honey (1989: 41) によると、その内容の正確さより、上流階級が使う発音の存在を明らかにすることが目的であったとしている。
- (10) Harrington *et al.* (2000) によると、エリザベス女王による1950年代から1980年代のクリスマスメッセージを調べたところ、50年代から70年代前半にかけて母音に大きな変化があったという。その1つが/æ/の音質であり、より広い音質になっていると指摘している。その要因について、Harrington *et al.* (2000) はイングランドで起こっている/æ/の変化の影響を第一に挙げたうえで、他にも年齢に

- よる筋肉の老化、より明確に発音するための過剰調音 (hyperarticulation) を挙げている。しかし、Cruttenden (1994³) が指摘するような社会的要因については触れられていない。
- (11) ここで注意すべきことは、/æ/を [ɛ] と発音することが悪いというわけではない。そもそも何が良き発音で、何が悪き発音であるかを判断することはできない。何が良き・悪き発音であるかについて、Jones (1956⁴: 4) は “Good” speech may be defined as a way of speaking which is clearly intelligible to all ordinary people. “Bad” speech is a way of talking which is difficult for most people to understand. It is caused by mumbling or lack of definiteness of utterance.” としている。
- (12) または、“lavatory” が4音節、“toilet” が2音節という発音のしやすさという点も影響しているのかも知れない。
- (13) /a/という音質はかつて “provincialism” (Wells, 1982: 281) の発音であったが、今では “chic” (ibid.) であるという。
- (14) 原文では “the right accent” となっているが、おそらく RP を指していると思われる。
- (15) 2013年4月3日の “The Great British Class Survey—Results” によると、3層構造の社会階級が7層になったという。これは2011年に新たな指標を設けて、16万人から得られた大規模な階級意識調査の結果報告である。この調査では、階級指標として言語は含まれていないものの、ますますイギリスの階級構造が多様化していると言えよう。

言語資料

- BBC *Science* (2013) “The Great British Class Survey—Results” (3 April 2013) <http://www.bbc.co.uk/science/0/21970879> [accessed 18 October 2013]
- BBC *News UK* (2013) “Huge survey reveals seven social classes in UK” (13 April 2013) <http://www.bbc.co.uk/comedy/collections/p00gs4vy#p00hhrwl> [accessed 17 November 2013]
- BBC *Newsnight* (2013) “David and Victoria Beckham 'getting posher', study finds” (17 April 2013) <http://www.bbc.co.uk/news/uk-england-22179969> [accessed 23 January 14]
- BBC “The Class Sketch” <http://www.bbc.co.uk/programmes/p00hhrwl> [accessed 17 November 2013]
- Hancock, M. (2012²) *English Pronunciation in USE*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Historic UCL Phonetics recordings pass to British Library (2008) <http://www.ucl.ac.uk/news/news-articles/0805/08052102> [accessed 30 Jan. 14]
- Ipsos MORI (2008a) “Perceptions of Social Class (trends)” (19 March 2008) <http://www.ipsos-mori.com/researchpublications/researcharchive/2404/Perceptions-of-Social-Class-trends.aspx?view=wide> [accessed 4 August 2014]
- Ipsos Mori (2008b) “Survey on Class” (19 March 2008) <http://www.ipsos-mori.com/researchpublications/researcharchive/160/Survey-on-Class.aspx> [accessed 4

August 2014]

My Fair Lady (1964) George Cukor, Paramount Pictures.

The Guardian (2013) “Steve Bell’s If ... on the 60th anniversary of the Queen’s coronation” (3 June 2013) <http://www.theguardian.com/commentisfree/cartoon/2013/jun/03/queen-prince-philip> [accessed 25 August 2014]

参考文献

- Crystal, D. (1995¹) *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fox, K. (2004) *Watching the English: The Hidden Rules of English Behaviour*. London: Hodder & Stoughton.
- Gimson, A. C. (1962¹, 1970², 1980³, 1989⁴ [ed. by S. Ramsaran]) *An Introduction to the Pronunciation of English*. London: Edward Arnold.
- Gimson, A. C. (1994⁵, 2001⁶, 2008⁷ [published by Edward Arnold], 2014⁸) *Gimson’s Pronunciation of English*. rev. by Cruttenden, A. Oxon: Routledge.
- Harrington, J. *et al.* (2000) Monophthongal Vowel Changes in Received Pronunciation: An Acoustic Analysis of the Queen’s Christmas Broadcasts. *Journal of the International Phonetic Association*. 30, 63-78.
- Honey, J. (1989) *Does Accent Matter?: the Pygmalion Factor*. London: Farber and Farber.
- Jones, D. (1909¹, 1956⁴) *The Pronunciation of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kerswill, P. (2007) Standard and Non-Standard English In D.Britain. *Language in the British Isles*. Cambridge: Cambridge University Press, 34-51.
- Longman Dictionary of Contemporary English* (2014⁶) Harlow: Pearson Education Ltd.
- McCrum *et al.* (1986) *The Story of English*. London: Farber and Farber.
- Roach, P. *et al.* (1997¹⁵, 2011¹⁸) *Cambridge English Pronouncing Dictionary*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roach, P. (2009⁴) *English Phonetics and Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, A. (2002 [1956]) *U and Non U*. Oxford: Oxford University Press.
- The Times* (2014) “Voice Coaches Wanted to Rub Polish Off Posh Accents” (7 April 2014)
- Wells, J.C. (1982) *Accents of English*. Volumes 1-2. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wells, J.C. (2008³) *Longman Pronunciation Dictionary*. Harlow: Longman.

(やまもと・こうじ 外国語学部講師)